



# 初参り式

の手引き

真宗大谷派

東京教区

## はじめに

このたび、シリーズ『人生の節目にお寺がある』リーフレットを作成いたしました。私たちの人生には様々な節目があります。その節目を「いのち」の節目として、南無阿弥陀仏の教えに出遇う勝縁としていただくことを願い、リーフレットと併せて御寺院で執行される際の参考として手引きを作成いたしました。

今回は「初参り式」をテーマといたしました。一般的に子どもを授かりますと「お宮参り」に行き、健やかな成長を願うのは私たちの心情でしょう。「初参り式」ではその心情に寄り添いながら、新しく生まれた「いのち」と共に、「人と生まれたことの意味をたずねる」大切な仏縁にしていきたいと願っております。

どうぞリーフレットならびに手引きをご活用いただき、ご縁ある方と共に聞法求道の道を歩まれることを願っております。

# 装束と荘厳

## 〈装束〉

- ・裳附五条差貫又は直綴墨袷袷

## 〈荘厳〉

- ・中尊前・祖師前荘厳
- ・杉盛華束一具又は紅白鏡餅一对
- ・内陣総灯明・総香
- ・中尊前・祖師前立燭（朱）
- ・前卓土香炉と上卓火舎香炉を取換え※
- ・前卓の前に短畳をおく※
- ・外陣正面に焼香卓をおく

・授与する念珠は広蓋にのせ、中尊前前卓香炉の左側にかざりおく

※導師焼香、表白がない場合は不要

『真宗』昭和四十四年三月号参考

右記は初参り式の基本的な荘厳ですが、それぞれの寺院に合わせた荘厳にして頂いても構いません。思い出に残るころのこもった式にしましょう。

## 〈荘厳の一例〉



## 初参り式 式次第(例)

\*開式の言葉

\*総 礼

\*導師焼香

\*表 白

\*誕生児念珠授与

\*総 礼

\*勤 行 正信偈 草四句目下 念仏 和讃 回向

(同朋奉讃式第二の形式による)

又は嘆仏偈 短念仏 回向

又は三帰依(パーリ文)

※勤行中に焼香案内

\*総 礼

\*お祝いの言葉

\*記念撮影

※装束は表白を読む場合、裳附五条差貫

### 参考メモ

初参り当日の式次第の一例です。小さいお子様が参加される仏事ですので、所要時間は短めです。

時間を短めに収めたい場合は、例えば上記式次第において

・勤行を嘆仏偈 短念仏 回向

とした場合、全体でおおよそ30分程度に収めることが可能です。

ご両親とお子様の緊張を和らげるよう、丁寧に次第の説明をしましょう。

## 表白(例)

### 表白 例①

本日ここに ○○さんご夫妻の ○○さん(ちゃん)の  
初参り式にあたり

謹んで尊前を荘厳し 懇ろに聖教を讀誦して  
ご家族ご臨席のもと ご奉告申し上げます

この度 遠き宿縁によつて結ばれた夫婦に  
不思議で希有な因縁により

新たないのちが誕生いたしました

阿弥陀如来は久遠のいにしえより  
われら凡夫のために

「いのちの深い願いに目覚めて生きよ」と  
呼びかけてくださっています

願わくは どうかその真実のみおしえに耳を傾け  
慈光照護のもと 健やかなる成長を念じつつ  
生まれた意義と生きる喜びを見出し  
確かな人生を歩んでいかれますことを

○○○○年 ○○月 ○○日  
○○寺住職 釋○○ 敬つて申し上げます

### 表白 例②

本日ここに 有縁の人々相集いて

○○さんの初参り式を執り行います  
惟うに 人としての生を受けることは甚だ難しく  
仏法に出遇うこともまた甚だ難しいことです

この一つのいのちの誕生は  
自らの思いを超えて いまこの私にまでなってきた縁そのも  
のを知らせるものであり

自らの思いを超えてある いのちそのものの尊さを照らすも  
のです

そしてそれは 阿弥陀如来によつて教えられるものでありま  
した

この無量の寿 無量の光は  
今まさに南無阿弥陀仏となつて

私にこのことを指し示してくださいます  
どうか この南無阿弥陀仏の教えを 親子 家族共々  
聴聞していかれますことを

○○○○年 ○○月 ○○日  
○○寺住職 釋○○ 敬つて申し上げます

表白 例③

本日ここに ○○さん ○○さん ご夫妻の長男（状況によつて言い換える）○○さんの初参り式にあたり 生まれてきたいのちに思いをいたし 阿弥陀さまのおはたらきの深さに感謝いたします

○○さん（子ども）は 数限りないご縁が重なって  
今 ここに誕生いたしました

誕生は人として生まれた意味をたずねていく旅の始まりです  
これから 過去・現在・未来を生きる多くの人と出会いながら 私がここに生まれたことを確かめる中で 生まれてきたことに喜びを見いだしていくことが 阿弥陀さまから願われています

一つひとつの出会いを尊び 敬つて ここに集われた方々とともに 阿弥陀さまからかけられている「あなたをあなたとして生きてほしい」という願いを聞き取り 「誰も代わることのできない私」として生き抜かんことを

生まれてきてくれて ありがとう

○○○○年 ○○月 ○○日  
○○寺住職 釋○○ 敬つて申し上げます

参考メモ

親鸞聖人御誕生会法要次第には次の和讃があります。

一 一のはなのなかよりは

三十六百千億の

光明てらしてほがらかに

いたらぬところはさらになし

一 一のはなのなかよりは

三十六百千億の

仏身もひかりもひとしくて

相好そうごう金山のごとくなり

相好ごとに百千の

ひかりを十方にはなちてぞ

つねに妙法ときひろめ

衆生を仏道にいらしむる

『真宗聖典』 四八二頁

## お祝いの言葉

〈お祝いの言葉①〉

本日は、ようこそ「初参り式」にお参りくださいました。

「初参り式」は、一般的には「初宮参り」と言つて、赤ちゃんが無事に誕生一カ月目を迎えたことを、地元神社の氏神様に感謝して報告する行事であると言われております。

それに対して「初参り式」とは、神社ではなく、お手次のお寺に生まれて初めてお参りすることを言います。なぜお寺にお参りするのかというと、阿弥陀如来の尊前で新しいのちの誕生を祝いつつ、阿弥陀如来が、生まれたお子さまにとどまらず、私たちみんなに願いをかけられている、その願い（教え）をいただくためでもあります。

『阿含経』<sup>あこんきょう</sup>というお経に「盲亀浮木」<sup>もうきふぼく</sup>という教えがあります。

「盲亀浮木」とは、海の中に棲んでいる目の見えない亀が、百年に一度だけ水面に顔を出す際に、偶然、海面に漂っている浮木のたった一つの穴に頭が入るといふ、それは滅多にあることではないという話で、つまりは、出会うことが

非常に難しく、類い稀なことの例えで、人として生まれること自体が極めて稀で、なおかつその人が仏の教えに出会うことの有難さの例えでもあります。

また、仏教をひらいたお釈迦様は、生まれて間もなく「天上天下唯我独尊」<sup>てんじょうてんげゆいがどくそん</sup>という言葉が発したとされています。「天上天下唯我独尊」とは、「この世には私に代わる者はなく、どんな状況においても私は私のままで、たった一人の尊い存在である」という意味です。

人生においては、楽しみや喜びばかりではありません。むしろ苦しく辛く悲しい出来事のほうが多いかもしれません。しかし、そんな中でも阿弥陀如来は、「計り知れないのちの歴史に感謝しつつ、生まれた意義と生きる喜びを見出し、確かな人生を歩んでほしい」と絶えず私たちに呼びかけてくださっています。

〇〇ちゃんの健やかなる成長を念じつつ、これからも人生の節目にはお寺にお参りをかかさず、どうか阿弥陀如来の願い（教え）に耳を傾け、確かな人生を歩んでいただきたいと思います。

〈お祝いの言葉②〉

本日は〇〇さんの誕生に際し、初参り式をお勤めしました。おめでとうございます。

お子様が生まれてから、多くの方から「おめでとう」と言われたかと思えます。

この「おめでとう」は「めでたい」ということで「愛でる」と「甚<sup>いた</sup>し」というという言葉が語源です。

「愛でる」とは「誉める」とか「讃える」という意味があります。その言葉に「甚<sup>いた</sup>し」「甚<sup>はな</sup>だ」「程度を超える」「非常に」という言葉が付いています。

一人の人が誕生するということは、そのこと自体が非常に讃えられるべきことであり、そのいのちの尊さはそれ以上でもそれ以下でもない、何とも比べることのできない本当に尊いことを賜ったということでもあります。

そして、「おめでとう」と言われた私たちは「ありがとうございます」と返します。「ありがとう」は「有難う」「有ること難し」ということです。私たちは一人の尊いいのちを賜るという有ることが難しいその事実「ありがとう」と申して

いるのです。

「おめでとう」「ありがとう」という言葉を交わす中で、本当に尊いことに遭遇したという事、そしてその事は有ることが難しいという事を受け取り続けてほしいと思えます。

〈お祝いの言葉③〉

本日は〇〇さんの誕生に際し、初参り式をお勤めいたしました。おめでとうございます。

お釈迦様がお生まれになられた際に七歩歩まれ、「天上天下唯我独尊（天の上にも天の下にもただ我ひとり尊し）」と叫ばれたといわれています。それは私たちの耳には、おそらく「オギャー」と聞こえてきたことでしょう。

お釈迦様が七歩歩まれた意味は、私たちが苦しみ悩む六つの迷いの世界を「六道<sup>ろくどう</sup>」といい、その六つの迷いを超えること（覚り）を、七歩と表現されたのです。

その「六道」とは、地獄<sup>じじく</sup>（孤独）、餓鬼<sup>がき</sup>（貪り）、畜生<sup>ちくじょう</sup>（従属）、修羅<sup>しゆら</sup>（争い）、人<sup>にん</sup>（一時の安定）、天<sup>てん</sup>（有頂天）の六つの迷

いの世界です。私たちの日常は、この「六道」の中を生き  
ています。有頂天になってしまうこともあれば、一転して  
苦しみの中を生きることがもでてきます。

「オギャー」という叫びは、その「六道」に沈んで生き  
る私たちに、「天上天下唯我独尊」、「どのような時にあつ  
ても、尊い存在としてある」という叫びなのでしょう。

一人の人が成長するとき、また一人の人を育てるとき、  
この叫びをいただきながら、歩んでいって欲しいと思つて  
います。

#### 〈お祝いの言葉④〉

本日は〇〇さんのご誕生にあたり、初参り式にお参りい  
ただきありがとうございます。

初参り式は、生まれられたお子さまの健やかな成長を願  
うとともに、親としての覚悟と有縁の皆さまの慈愛を確か  
め、これから阿弥陀さまとのご縁を大切に過ごしていくと  
いうことは、どういうことなのかをたずねる場でもありま  
す。

親としての歩みの原点は、いのちそのものが、遠く過去  
からはるか未来への繋がりのなかにあることを、子どもが  
生まれたという事実を通して、あらためて知らされるとい  
うことではないでしょうか。

思い通りになることも、思い通りにならないことも、過  
去から未来への永劫のときの流れの中にあるわけですが、  
いま現在このようにあるいのちを丁寧に生きるというこ  
とが、阿弥陀さまから願われているのではないのでしょうか。

平穏な日々だけではないかもしれません、阿弥陀さま  
とのご縁をいただいたこの場所を大切にして、これからの  
日々を阿弥陀さまからの呼び声を聞くこと（聞法）と、そ  
して南無阿弥陀仏と称える（称名念仏<sup>しょうみやねんぶつ</sup>）生活を切に願  
い、お祝いの言葉といたします。

今日は、ようこそ皆さまでお参りくださりまして、大変  
ありがとうございました。

〈お祝いの言葉⑤〉

初参り式というのは、生まれた赤ちゃんが初めて阿弥陀さま（仏さま）に出あう儀式です。それならお宮参りと一緒じゃないかと言われるかもしれませんが、初参り式というのは、単に赤ちゃんの誕生を祝ったり、健康に育つように願ったりするだけのお勤めではありません。

どういうことかというと、初参り式では、阿弥陀さま（仏さま）から私一人に向かつてかけられている願いをいただいでいくということが一番大切なことです。今日の式は、生まれた赤ちゃんはもちろんのこと、ここに集われた方々自身のための儀式でもあります。

子どもの誕生ということは、同時に親が誕生したともいえます。子どもが成長していくなかで、親として子どもに多くのことを教えることになることだと思います。しかし、親として教えるということは、同時に親として気づかなかったこと、忘れていたことを子どもから教えられ、気づかされることもあります。ですから、親と子どもは、上下の関係ではなく、一人の人として生きるという点におい

ては、等しいのです。

阿弥陀さま（仏さま）は人間の立場とは関係なく、一人ひとり、いのちあるすべてのものを救いたいと見守り、はたらき続けてくださっています。阿弥陀さま（仏さま）の前では、私たちは等しく仏の子なのです。親と子が互いに尊重しあい、人として出会い続けていく中で、お互いに生まれてきたことへの本当の喜びを見いだしていくことが、阿弥陀さま（仏さま）から願われています。

短い時間ではありませんでしたが、お祝いの言葉（法話）とさせていただきます。本日は、お参りいただき、ありがとうございます。そして、あらためて新たないのちの誕生にお祝い申し上げます。



### 『誕生児念珠』について

東本願寺には、ご寺院やご門徒に提供できる教化教材として、無償で『誕生児念珠』をお渡ししております。

『誕生児念珠』は、白い小型の念珠が「遠慶宿縁（遠く宿縁を慶べ）」と記された厚紙に包まれており、「ご家族のみなさまへ」という添え書きが同封されています。誕生という尊いご縁で結ばれた方々に、共に念仏者として歩んでいく機縁として、初参り式・誕生児参りの記念としてお渡しください。

教務所にご連絡いただきましたら、念珠をお渡しいたします。ある程度在庫を確保しておりますが、数が多い場合は準備にお時間をいただくことがありますので、時間に余裕をもってご連絡いただくと幸いです。

発行

真宗大谷派

東京教区 教化委員会 広報出版部門

〒 177-0032 東京都練馬区谷原 1-3-7

TEL : 03-5393-0810 FAX:03-5393-0814

mail : [tokyo@higashihonganji.or.jp](mailto:tokyo@higashihonganji.or.jp)